

(一) はじめに

題名、もしくは断片的に内容を知らしめる資料があるのみで、本文そのものが現在に伝わらない物語、それが散逸物語である。現存する物語に対してその数約二四〇種、つまり現存物語が実は物語全体の氷山の一角であるというのも頷ける話である。また、それだけ現存物語に對する歴史的評価が高いのもわかるのではあるが、だが、すでにそのような散逸物語もおおかつた調べ尽くされた感がある。もちろんそれは、復元されたことによつて話の大筋がつかめるようになった、ということにある。しかし、散逸物語は単なる内容の検証だけが重要視されるにとどまらず、これら存在の意義を検証できる、重要な立場でもって文学史上の物語史における役割を検証できる、という重要性にあるのではないだろうか。つまりそれは、同時に当代の物語の実態を明らかにすることも意味するのだから。

更に、和歌が第一とされる頃物語は第二芸術ととらえられてきた感があるが、果たして本當に物語は第二芸術でしかなくつたのだろうか。それでは、現在散逸物語の復元に多大なる功績を与えている「風葉和歌集」に残される数多くの作品を、どうとらえたらよいのだろうか。それらは形こそ失われているとはいへ、物語史上で様々な重要な役割を担っていたのではないかと考えられよう。

これを補うものとして「六百番歌合」中の俊成の有名な判詞である。「源氏見ざる歌詠みは遺恨の事なり。」(冬部、十三番「枯野」)がある。これこそ物語、特に「源氏物語」が和歌と同等である意識がもたれているという事のあらわれである。また、同時にそれまでの文学史で両者が同列に扱われなかつたことも暗に指し示されているといえるだろう。

さて、今回扱おうとしているのは「更級日記」作者として有名な菅原孝標女の作品である。彼女はこの日記以外にも物語作品を残している。それは、定家自筆本「更級日記」奥書によつて明らかである。ひたひたのかみすがはらのたかすゑのむすめ日記也。母倫軍朝臣女。傳のとのほ、うへのめひ也。よはのねざめ、みつのはままつ、みづからくゆる、あさくらなど、この日記の人のつくられたるとぞ。

この四作品は、現存物語である「夜の寝覚」「浜松中納言物語」「散逸物語である「みづからくゆる」「朝倉」のことである。「夜の寝覚」

ことが出来る資料でもあるだろう。今の「風葉和歌集」は、文永八(一二七二)年に大宮院(藤原太子)の命によつて選出された物語歌集で、それは当時存在したであろう約二百の物語作品中に詠まれている和歌から採出されている。二十巻の書物の内訳は、春・夏・秋・冬・神祇・釈教・離別・窮旅・哀傷・賀・恋・雑の各部に渡り(最末部の二巻は散逸している)、和歌は約一四〇〇首ある。仮名序は古今和歌集に倣い、部立ては勅撰集の形式に倣った物語和歌集、という特異な歌集だが、その成立には準勅撰とも思われる使命が持たれて作られているのがうかがえる。ちなみに「源氏物語」の歌は一八〇首あり、現存する約二十三篇の物語の歌が五七〇首余、残りの一八〇種近くの散逸した物語の歌が八四〇首余ある。

今回扱う「みづからくゆる」も「朝倉」も散逸のため、この和歌集の中に名は留めていないものの、内容を知ることが出来るのは詞書と和歌だけにすぎないのが現状である。その重要資料である詞書と詠入名であるが、「無名草子」と「後百番歌合」は「その物語において、その歌の詠まれた時の官職名」または「その物語において、その歌の詠人が最も活躍したときの官職名」であるのに対して、「風葉和歌集」は「その物語において到達した最後の官職名」というようになっている。この統一性こそこの歌集が正確であることの証明である。加えて、この歌集が編纂されるいきさつとして、文永二年(一二六五)成立の第十一代勅撰和歌集である「統古今和歌集」の存在を考えねばならない。これには孝標女作者と考えられている「浜松中納言物語」の和歌が二首(巻十五・恋五・一三四番歌、巻十六・哀傷・一三九〇番歌)、「菅原孝標朝臣女」の名で載せられている。ちなみにこれらは「浜松中納言物語」では主人公の中納言の歌(巻二・四七番歌、巻五・一〇七番歌)として載せられている。勅撰集に物語の歌を作者名で載せることは、勅撰集本来の採集姿勢からすれば、このことから、それ以後の勅撰和歌集の本来的な採集姿勢を守り、「風葉和歌集」が編まれたといつてもよいのだから。

「風葉和歌集」は一部欠けているため全文を読むことはできないが、ある程度全体像がつかめ、また長編だとされる作品である。「浜松中納言物語」は、その物語の性質が孝標女の好むであろう特性の夢、仏教等の取り入れにより、孝標女を作者として疑う余地がないとされる作品であり、この二作品は現在でも読むことができる。そして残る作品「みづからくゆる」「朝倉」は、「風葉和歌集」「物語二百番歌合」などに残されたことによつてのみ知られる、いわゆる散逸物語である。もちろん、文末の「とぞ」から断定は危険であるが、逆に彼女の作品ではないと否定する理由もなく、ほとんどの学説がこのことを肯定している。よつて、ここではその説に基づいて孝標女の作品として扱う。今回ここで扱う孝標女の散逸物語とはこの二作品をさしていうことを先にお断りしておきたい。また、本論文はこれらの作品に新考を加え、そして孝標女の物語としていかにとらえるべきか、ということについて考えていく予定である。

(二) 散逸物語資料について

散逸物語を考察する際に最重要資料として知られるのが、「物語二百番歌合」「風葉和歌集」である。そこで、今回扱う作品を説き明かす手がかりとして、はじめにこれらを提示しておくことにする。「物語二百番歌合」はその名の通り物語歌二百番の歌合で、藤原定家の撰による。建仁二(一一二〇)年から四年間に成立が推測されている(注1)。前半は「百番歌合」・「源氏狭衣歌合」などと呼ばれる。「源氏物語」と「狭衣物語」の歌を左右に番えて百番にしたもの、後半は「後百番歌合」・「拾遺百番歌合」などと呼ばれ、「源氏物語」の歌を左方にし、現存物語である「夜の寝覚」「浜松中納言物語」と八つの散逸物語を右方にした、あわせて十の物語が番えられている。今回扱う「朝倉」はこの八物語に入っている。

ちなみに、「百番歌合」は「源氏物語」の秀歌を選抜き、結番するのに適当な「狭衣物語」の歌を連想などによつて選り出して、歌合に仕立てている。「後百番歌合」は、多くの場合、右方の十物語の秀歌を先に選出して、結番したと考えられている。よつて、散逸物語にある歌は、その物語の中でもぬきんでた秀歌だといえよう。この歌合についてであるが、撰者が「更級日記」奥書に孝標女の作品をあげた定家だということは重要だろう。この事実は、「後百番歌合」で「朝倉」を探り上げて「源氏物語」と番えられたことによつて、先の奥書の正当性を証明することが出来ると思われられる。また、「朝倉」以下の他の作品における、定家の源氏物語享受の様を比較検討す

「風葉和歌集」によつて時代区分されている。それではこれらの資料をもとに、孝標女の散逸二作品の考察を進めたい。

(三) 「みづからくゆる」

「みづからくゆる」の内容をうかがい知るものとしては、「風葉和歌集」中の十首(詞書中の一首(九七六番歌)も含むと十一首)と「狭衣物語」巻一(注2)の記述がある(注3)。内容はすでに先学者である松尾聰氏(注3)、小木喬氏(注4)、樋口芳麻呂氏(注5)、石川徹氏(注6)らによつて示されているが、ここでもう一度確認するとともに、人物像、特に女性に関して考えていきたい。

さて内容の確認の前に、前述したようにこの作品が「更級日記」作者の物であることを明示しているのは、何も定家筆本の奥書だけではないことを示しておく。これは樋口氏の発見であるが、「風葉和歌集」巻十七・雑二・一三〇四番歌の左大将大内山にはべりけるころ、松のうれふく風のおとのみみみとまりて

みづからくゆるの尚侍

まだ人のしらぬ山辺の松風も音して滞るものとこそ聞け
「みづからくゆる」(「更級日記」中では三六番歌)である。これによつて「みづからくゆる」の孝標女作者説は裏付けられよう。なぜならそのどちらにも共通する上の句を所有する和歌は他には見当たらないのだから。また、宇多上皇が隠棲した任和寺(別称、御室)がある「大内山」が、あまり物語の舞台として取り上げられてはいないのに関わらず(注7)。「夜の寝覚」「浜松中納言物語」には出てくる。よつて「みづからくゆる」も含めこの三作品は孝標女の作としてとらえることができる(注8)。という共通項より、この作品の孝標女作者説はほぼ確定しているのである。

ただ、この作品は物語評論の書である「無名草子」に見えないため、その成立年時を疑うことも出来る。だが、このように作者を推定し得る、また裏付けられる要素を持っているし、「朝倉」同様、定家の奥書以外からも孝標女の作品であることを確認できるのだから、や

はり孝標女の作品としてよいかと思われる。
そこで内容についてであるが、神野藤氏のまとめたものをここで借りることにする。

左大将の自らゆえのままならぬ恋と悔恨とを語る物語が、左大将は、知りそめた女君を、大内山に隠しすえていたが、女はつらい思いをするこゝとがあり、一度は行方をくらますが、再び見出され、嘆きをくりかえしている。この女君は、後に尚侍となつて左大将から離れてゆく。また、右大臣の娘、彈正のみこの娘との恋が推測されるが、いずれも幸福なものではなかつた。(注9)

この内容を明らかにする歌十首の内訳は、宰相中将三首、左大将二首、右大臣女一首、尚侍二首、彈正のみこの娘一首、源大納言女一首である。この資料からだと、内容の大概を知るのはこれが精一杯であろう。つまり、これらの登場人物の關係、性格を推測するのも、詞書による状況と歌そのものだけなのである。最も初発の先学者である松尾氏は、孝標女作者説を裏付けるとともに、登場する女君たちを以下のように述べられている。

強ひて孝標女らしい点を日記に比べてあげてみれば、(一)尚侍・右大臣女・彈正の親王の女等登場せる女性の性格が不思議に何れも夕顔・浮舟型を思はせるといふことは、日記に孝標女が己の理想を「光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女君のやうにこそあらめ云々」と書いてあるのと符号すること。(二)その夕顔・浮舟型の女である尚侍が、左大将のために大内山に隠し居られ、心細く同棲してゐるのは、同じ日記に「物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を年に一たびにても通はし奉りて浮舟の女君のやうに山里にかくしすあられて花紅葉月雪をながめていと心細げにめでたからむ御文などを時々待ち見などこそせめ」とあるのと一脈通じるものがあること。(以下略) (注10)

左大将をめぐる尚侍、右大臣娘、彈正のみこの娘たちの恋物語と三人の女が何れも夕顔・浮舟型の従順な性格の持主らしく、左大将も「自ら悔ゆる」性格の持主であるらしい点、平安後期の思案型、非行動型の人間たけを大きくとりあげて成立した物語として興味があらう。(注11)

また小木氏が

主人公の左大将が、尚侍・右大臣女・彈正宮女(?) いずれも夕顔・浮舟型の女と恋をするが、左大将自身現実の生活にはあきたらぬけれど、さればといつて思い切つて世を捨て去ることもできぬといふ、当時の貴族の一般風潮に染つた人らしく、いつも相手に物思をさせ、自らも悔いてばかりいるというやうな物語。(注12)

と内容を説明されているとともに、女君達を松尾氏同様「夕顔・浮舟型」と述べておられる。だがそのパターン化した見方だけで良いかと考え、今回この論では主に人物造型について私見を加えたいと思う。

顔的なのは左大将に伴われて大内山に連れて来られる境遇が似通うにすぎないのではなからうか。これは後妻打ちとも関わつてこよう。夕顔も頭中将の北の方に脅されてその身をひいてゐる。

また、九五〇番歌の詞書「左大将つらきまに侍りければ、ゆくへもしら侍らざりけるを、尋出でて、たちかへりうらみわび侍りければ」であるが、これから左大将の行動をつかかへりうらみわび侍りければ」の存在がいたとも考えられ、そのせいで自ら身を引く方向をくらまし、つまり尚侍は自主的に左大将のもとを去つたのでは、とされている。この部分、これまで「たちかへり」は「連れ戻り」「くりかえし」の意でとられてきた。しかし、左大将の「みづからくゆる」状態が変わらないとしたら、尚侍が帝のものになつた、または出家したとも考えられそうである。尚侍というのが最高位ならば出家したことはなさそうだが、「うらみわび侍りければ」をそこで、「恨み統ける氣力もなくなつたので」と解し、その原因を推測すると、そのような考え方も出来よう。

右大臣の姫君は、九三八番歌と「狭衣物語」巻一(注14)の記事からその人物像が浮かび上がる。松尾氏は、高貴な身分にしては素直な歌であるから性格的に夕顔・浮舟型だとして(注15)、「狭衣物語」の記事に対する補注(注16)では、「その父母からきわめて大切に育てられ、ろくろく人を近づけさせられなかつたことが、多少可笑しきをもつて描かれていたと考えられる。」との様子が述べられてゐる。また、彼女が「狭衣物語」の右大臣の姫君に投影してゐるの意見もある(注17)。この右大臣の姫君が左大将と結婚したことによつて、もしくはこの姫君が脅したことによつて女主人公と考えられる尚侍は大内山から姿を消したというのである。しかしこの姫君が、「狭衣物語」の姫君の逆照射でその性格を強いられるのはどうなのだろうか。九三八番歌からは、そのような脅すなどの冷たい行動は考えられない。ただ、どうしてもこれ以上の証拠がないため、それ以上の推測は残念ながら不可能である。

彈正のみこの女が九七六番歌によつて知られるのは、「おどろかさ歌てまうできたりけるを」とこが「いとかくと推測されることである」と歌つたことから、出家した女性ではないかと推測されることである。この人物に対して、松尾氏はまた「純情可憐な女である。尚侍・右大臣女と同様、只管男を恨むまいと己が理性に言ひ聞かせてゐる女である。やはり夕顔・浮舟型の女性の中に数へ入れてよきさうに思はれ

まずは、「風葉和歌集」巻四・秋上・二五〇番歌(源宰相)と二五一番歌(宰相中将)・卷十八・雜三・一三九二番歌(宰相中将)・これらに加えて卷十三・卷三・九三七番歌(左大将)の主人公の歌、すべて左大将のいる大内山での友の語らひであることに注目したい。中でも二九〇番歌の左大将の歌

大内山にこれかれまうてきてかへる程に、雁の鳴きてわたるによみ侍りける

みづからくゆる左大将

立ちとまれ雲みにわたる雁がねやへたつ霧のはれままつ程は「風葉和歌集」序文の「雲をわたるかりがねにともしたひ」に通じ、また「源氏物語」須磨巻で源氏を訪れた頭中将(この時点では宰相である)とのやりとりである。以下四首に通じないか。

(源氏) 故郷をいづれの春か行きて見むうらやましきはかへるかりがね

(頭中将) あかなくにかりのときよを立ちわかれば花のみやこに道やまどはむ

(中略)

(源氏) 雲ちかく飛びかふたづもそらに見よわれは春日のくもりなき身ぞ

(頭中将) たづかなき雲井にひとりねをぞなくつばさならべし友を恋ひつ、

前半の組の「雁」、後半の「雲(井)」との共通に加え、京から離れたところに住む左大将は源氏の影響で造作されたことは、これにより明らかである。また、左大将の「みづからくゆる」性質と、都から離れたところという設定は宇治十帖にも似通い、そこから源氏の影響の方が強いとも見られる。更に、これから考察していく女君たちにして左大将が源氏に比せられてゐるのも、「源氏物語」の熱烈な愛読者であった孝標女だからであり、またそれが平安後期物語の免れない宿命だったとも言えるからである。

さて、女主人公であらうとされる尚侍は、九五〇番歌・一三〇四番歌の二首から、左大将とともに大内山において同棲していたものの、左大将のもとから身を引いて行方をくらまし、後に左大将に連れ戻されるなどの行為が考えられる。そこから、「男の態度を憂し辛しと堪へ難く思ひながら、その境遇に忍従し、「つらかりしきへ形見とぞ思」つて、満足して、淋しく自ら身を引いてゆく純情可憐な女の姿」(注13)というある程度の性格が推測され、それにより「夕顔・浮舟型」と位置付けられている。身を引く辺りは浮舟的行動であるが、夕

る。(注18)としている。

最後の源大納言女は、一四一七番歌の異本歌によつて知られるのである。「かれがたにになりけるを」とこ「称されるこの男性は、おそらく男主人公である左大将だと思われ、左大将は、彈正のみこの女には「おどろかさされてきたりける」とことして、そして源大納言女には「おどろかさすにもあらねども」と手紙をよこされる。周りの女性に自ら振り回され、ゆえに物思いの深い人物として、つくづく運命に翻弄される男性として構造される。たかだか十首の中に、四度も「恨む」の語が使われているこの物語の登場人物として、無常を感じずにはいられない人物としての構造だろう。また、孝標女の亡き姉が求めたという散逸物語の「かばね尋ねる宮」との共通も、その題名にみられる主人公の性質から見出せよう。

さて、以上女性像を見てきたが、前者の三女性の性格いすれに対しても、松尾氏の「夕顔・浮舟型」との位置付けは変わることがない。そして、その後の散逸物語研究者はそれについて何も異論を述べてはおられない。私もその性格づけは間違つてはいないと思ふのだが、必ずしもその型通りではないとも思われるのである。なぜなら、「更級日記」中に孝標女が夕顔や浮舟を思慕している記述があるからといって、彼女が自分の創作物語の登場人物に安易にその女性像を重ねたりはしないのではないかと、この見方が出来るからである。そして、それらの女性像と重ねること、また重ねないことによつて、その型を用いた彼女が物語内の人物造形でもって目指そうとしたものがわかるのだらう。

このような浮舟物語受容の様相については、以下でも触れて述べようと思う。以上、簡単ではあるが考察してみた。

(四) 「朝倉」

「朝倉」の内容をうかがい知るものとしては、古い順に「無名草子」・「後百番歌合」十四首(三〇一〜三二六番)・「明月記」・「風葉和歌集」二十首(内一首は巻数・部立名が不明で、詞書と作者名のみで歌そのものがない)がある。ちなみに「風葉和歌集」の歌の内六首が「後百番歌合」と重なる。同じ散逸の「みづからくゆる」とは遠い、資料数が圧倒的に多いのが強みで、よつて内容はかなり詳細に考察されている。このように残存所収歌が多いということによつて、相当の長編作品だったとも推定され、その和歌が内容の詳細な検証を助けてくれる。ちなみに「風葉和歌集」中の入集歌数は多い順で十一番目で、散逸物語としても多い順で四番目である。

内容はすでに先の「みづからくゆる」と同じ先学者である松尾氏、小木氏、樋口氏らによって示されているが、ここでもう一度確認することにしたい。

内容については、神野藤氏のまとめたものをここで借りることにする。

三位中將と朝倉の女君との恋物語。女君は、出家の後行方知れぬ父前河守を思っていたが、やがて三位中將と結ばれる。しかし北の方堀河殿の脅迫に白河の地を去る。あるとき式部卿宮の訪れをうけ懐妊するが、父を慕って陸奥へ下る途中、嘆きのすえに粟津で入水する。入水の噂を聞いて、男君は石山に参籠するが、何者かに助けられた女君もまた石山に籠りあわせていたのだ。女君が生んだ姫君は宮に引きとられ、皇太后宮に出仕した女君はそこで男君と再会、やがて男子を生み幸福をうける。堀河殿は、身分卑しい「くもて」の子を生み、見捨てられる。後、姫君は皇后、男君は関白、子息は権中納言に昇進する。(注1)

また、樋口氏は資料となるものをもとに、内容を話の順序に二十三段階にわけて更に細かく示している(注2)。その樋口氏の復原された話の順によると、「後百番歌合」の番順は2・5・6・5・5・1・0

3・1・2・7・8・9・3と並べられる。「後百番歌合」の右方にあげられた十の物語のうち、現存する物語は「夜の寝覚」と「浜松中納言物語」だけだが、その「浜松中納言物語」の内八首が物語の進行順に並んでいることから考えると、「後百番歌合」は右方を選んだ後に左方の「源氏物語」を選んだというのに違っている(注1)。そこから、復原された話の順も再考の余地があるだろうとだけ述べておく。

さて、これらを参考に、「みづからくゆる」同様登場する女性像を考察しようと思うのだが、この物語は朝倉女君という女主人公を核として成り立っている。彼女を中心に考察したい。この人物に対して、鈴木氏は男君二人とともに以下のように位置付けておられる。

朝倉女君は、妻入三位中將を連れてくるうちに、好色の式部卿宮に近づかれて懐妊し、隠れ家で女児を分娩後、父のいる陸奥に旅立とうとして粟津の浜で投身し助けられたということがあるらしい。この場面から考えても、三位中將は燕、式部卿宮は匂宮、朝倉女君は浮舟に当たり、朝倉女君の投身が実は単なる噂であったことも浮舟の場合と同様であるが、ただ、浮舟に産んだことがないだけは異なっている。朝倉女君は強い母性愛によって、生まれた女児を養育し、出世させるらしく、部分的に寝

「心高し」がこの物語の特徴とされる以上、この語句の考察は重要となるので、単純に「理想が高い。気位が高い。」だけではない捉え方をしなければならぬ。そして、物語の主題を担う主人公こそ、その要素が付随して来る。孝標女は朝倉女君に何をたくしたかったのか、という一面が見られよう。

次に、朝倉女君の入水に関して考えたい。彼女の入水に関しては、「後百番歌合」五十七番・三十四番歌

権中納言ときこえし時、あさくらの君あふみのうみに身をなげけりりと入つてにききたまひけるころ、いしやまにまうで給ふとて

こひわびぬ我もなきさに身をすてておなじもくづとなりやしなま

の歌と、同じ歌である「風葉利歌集」巻十四・恋四・一〇四七番歌の詞書

あはれと思ひける女の、あはづのはまのほとりにて身をなげけりよと聞きて、石山にまうで侍りけるに、うちいでるほどすくとしてよみはべりける

から知られる。彼女自身の歌は、その後石山にこもっているときのものしかないため彼女の本当の気持ちこそあきらかではないが、この事件が彼女の転機に関わって来よう。

入水物語系譜には「狭衣物語」の飛鳥井の女君物語があり、彼女は夕顔の境遇と浮舟の入水を合わせて作り出されたものと見られている。「朝倉」ヒロインの朝倉女君もモデルは夕顔か浮舟かと思われるが、成立年代からは「朝倉」。「狭衣物語」の順になるので、その方向に影響があると考えられよう。となると、先程の「みづからくゆる」の右大臣の姫君が「狭衣物語」の人物造型に影響していることと考えると、あわせて、「狭衣物語」が孝標女の作品からいかに影響を受けたか、ということも考察できるだろう。

また、入水譚として古くは万葉集などの処女塚や、「大和物語」の生田川伝説におけるつま争いゆえの入水、というパターンがあるが、「源氏物語」の「浮舟物語」を処女塚伝説から捉えることとなると、入水が浄土思想では地獄に墮落することを意味する平安時代では浮舟は神女になれないから、この系譜とは言えないのではないかと考えられる。おそらくは、浮舟物語から始まる入水譚における入水と死と再生の通過儀礼としてとらえるのではないか。「自己殺し」は生きていく過程で犯した罪をかぶっている未熟な自己を殺し、純粋な魂を持つ人間に変貌していくものである。というのであれば、「朝倉」が「心高し」ということと同趣に扱われるのも納得できる。時代と共に入水の意味は変わってきたのであろう。その意味で朝倉女君の入水

寛・浜松との類似点が指摘されても、浮舟説話が基盤となって、それが別の方向に転換した物語であると言えよう。(注2)

また、松尾氏が作者を孝標女に確定するために出した十項目の一つには

女主人公朝倉女君は、近江湖に入水したが、これは明かに源氏物語の浮舟の入水に倣ったものであろう。その他の点でも朝倉女君は浮舟・夕顔のやうなほかなない境遇に住んだ女らしい。このことは更級日記作者が、浮舟・夕顔を理想の女としたことと共通している。(注3)

とあり、ここからもやはり浮舟的人物像であることが強調されている。

宇治十帖つまり浮舟物語を受容した物語、それは登場人物の三角関係の構造や、女君の入水事件というところからも知られる。しかし、朝倉女君は出産し母となった女性であり、また出家もすることもない。むしろ軒余曲折がありながらも、幸福をつかむ女性として造型されている。また父との関わりが強いところは、あまり家族関係に幸せを見なかつた浮舟とは異なり、それよりは明石の上や、宇治の姉妹と重なるだろう。特に、おそろく身分の低い女性だという設定の彼女が、娘(式部卿宮の子)を皇后宮の地位へと昇らせるといふのは、浮舟から離れやはり明石の上に似通うだろう。小木氏が、この「朝倉」とともに「心高き」「河霧」「いづれも「無名草子」にあげられている)を「女の幸」の物語とよんだのは、当時の女性にとつて身分の高貴公から愛されること、立派な子供の母になることが女の幸せだからである。そして、この作品の制作時、明石の上物語が孝標女の念頭にあつたことは間違いない。そのような幸せ追求の一つの型として、この作品が作られたと考えられるのである。ただ一つ、入水に至るまで心を割いた二人の男性のどちらの子も産む、ということなどにも着目すると、彼女自身の心の幸せについて再考しなければならないことも考えられる。

また、石川氏も「心高し」について以下のように論じられている。「心高し」という言葉は、平安朝を通じて、「心に高い理想を抱いて、目前世俗の名利によるめかず、よく高邁の精神を持って、将来に希みをかけている」人物の心の状態をいうのであるが、「略」源氏物語以後の後期文学では、現世の幸福を移ろいやすさものと観して、「将来」といつても死後の世界の幸福を願い、浄土に生れ替る事を理想とするという風に、意味内容が変つてきたとしてよいであろう。したがって「心高き」を構想の重要な因子とする作り物語の方も、それだけ矛盾分裂を孕んで、不幸いづれとも見られる複雑な形に変わって来たと考えられる。(注4)

はとらえることが出来るだろう。つけくわえて、「みづからくゆる」同様、この入水という事件から「かばね尋ねる宮」との関連も考えられる。どちらも散逸なので推論しできないが、ただ好んで取り寄せた物語とは意味合いが違うので思い入れがあることとみられ、素材や事件こそ同じだが、これを越え、転換させたところで入水をとらえていることは、以上からも明らかだろう。

このように、多くの場合朝倉女君は浮舟と関連して、つまり「源氏物語」の受容と関連することは見逃せないのである。以上人物像に現れる特徴を考察してきた。

(五) 題名と成立背景について

「みづからくゆる」「朝倉」、これらが内容において和歌と密接に関連しているのは、検証しようとする対象が歌集・歌合だから、というの言うまでもないが、それに加えて題名も和歌の匂が強く、関連があるだろう事は一目瞭然である。そこで題名は主題と関わるし、物語の構成にも重要ということから、少し題名について考えてみたい。

もちろんこの二作品だけでなく、散逸物語特に平安末期から鎌倉期にかけての作品がその傾向にあるのは石川氏によって明らかである。(1)単に命名に当たっての修辭技巧として、歌の匂らしくなったのか、それとも(2)物語中に挿入せられた作者の新しく作った和歌の一句に基づくのか、(3)有名な古歌の一句を借用したのか、の何れであるか早急に決りたい。(注5)

とはいえ、「みづからくゆる」はおそらく(2)であろうし、「朝倉」が(3)であることは言うまでもなく、またそれを踏まえた引き歌ならぬ引き物語として成り立っているとも考えられる。さて、そのように物語の構想までもその和歌に負うことの意味とは何だろうか。続けて石川氏は

当時、物語作者が新たに物語を作る際、古歌によって物語の構想のヒントを得て、その和歌の主題を物語にまで敷衍したといふ事が考へられるのであつて、この事は定家等が物語の内容を短歌の中に圧縮再現する事によって、かうした定家等の物語的短歌の創作と興味ある対照をなす短歌的物語が作られたと考へられ、平安末期に於ける和歌と物語の関係がかうした姿態に於いて捉へられるのである。(注6)

と述べておられ、また、現存物語が必ずしもそうではないことについて当時の物語が全部が全部、古歌の主題を主想とする物語であつたといふ

のではなく、和歌と物語の親近の故に、歌によく出る句、歌語が、題名にもされるし、また、物語内容からそれと似寄った古歌が聯想されて、その一句が題名に採られたといふのが、やはり最も普通で、只、さうした傾向の極端な現はれとして、古歌のテーマを物語の主題または主題とするといふ一面すらあったといふのが適當な観方であらう。(注7)

と述べられている。「みづからくゆる」はおそらく左大将、もしくは登場人物によって詠まれた歌の一句であろうし、「朝倉」は神楽歌の朝倉や木の丸殿に我が居れば我が居れば名告りをしつつ行くは誰もしくは「新古今和歌集」一六八九番歌の天智天皇御歌のあさくらやきのまろどのに我おればなりのをしつ、行はたがこそを引き歌とした、「後百番歌合」五十四番・三〇八番歌、みそめたまへりしころ、わが心ながらうつし心もなきほどに、人のそしらむこともたどるまじうおほゆるを、おぼつかなきなむ心うき、なほなのりせよとのたまひければ、

なるるともきのまろどののくもみなるあさくらまではたれかたづねむ

に寄ることは明白である。この歌が主人公の造型に携わり主題と関わるが、それにとどまらず古歌の変奏が見られ、古歌を主題に持つていながら短編小説に終わらせなかったのは、孝標女の作家としての力量といえよう。これに関して辛島氏の論(注8)がある。

また石川氏は、特に古歌が物語の主題に関わる傾向が天喜三年の物語合の十八作品に顕著であることも、あわせて述べられている。その天喜三年はというと、孝標女が四十八歳で、例の「更級日記」最終部の阿弥陀来迎の夢を見たという年である。その年までの物語の題名の状況だが、彼女が治安元年(十四歳時)に叔母からいただいたという物語の中にはとりわけ和歌的な題名のついた作品はないので、約三十年という時代の流れが知られるだろう。つまり、それらの物語の時代から「源氏物語」を経た物語史上で、題名と内容が和歌と切つて切り離せないものになつてい道を辿り、孝標女の時代へと引き継がれていったといふことである。「源氏物語」は巻名が和歌に影響されているし、また「源氏物語」以後の物語の流行に孝標女がのつたとも考えられないことではない。石川氏は、

源氏物語によつて、和歌の情趣により、氣分的に統一せられ、引歌の使用も、進歩して草紙地に融け込み、更にその短編小説的部分に於いては、その構想の材を古歌に得るといふ風になつて極度に古歌が活用され、また殆ど巻毎に自作の和歌を詠み込む事によつて、さうした和歌中の語句から巻名が出来るといふくらゐになつた。この傾向が極端に推し進め

の順と考えられ、それは先に挙げた「まだひとめ」の歌が万寿二(一〇二五)年、大内山(長元九(一〇三六)年以降の事実から考察されている。これらを合わせてみると、孝標女の創作物の成立は、「更級日記」「朝倉」を合わせてみる、「みづからくゆる」「夜の寝覚」の順でほぼ間違いないだろう。だが、小木氏の「無名草子の物語の部」は大体が年次順(注4)によると、「源氏」・「狭衣」・「寝覚」・「浜松」・「朝倉」・「無名草子」の物語の評価と比べて、再考の余地があることだけ述べておく。

(六) 最後に

ここまで孝標女の散逸物語を扱ってきたが、とりわけ浮舟物語受容の要素が強いことが知られた。特に、登場する女性たちの行動や性格づけに浮舟的なところが多くみられるのである。現存物語にももちろん「源氏物語」、特に浮舟物語の受容が濃く、そこに「更級日記」の中での彼女の浮舟的生き方への憧憬と重なることが認識される。ちなみに「更級日記」の浮舟に関する記述は、治安元年(一〇二二)年三十三歳・長元五(一〇三二)年三十五歳・長久元(一〇四〇)年三十三歳・永承元(一〇四六)年三十九歳の四箇所にわたる。内容がかなり、そして知られる散逸した物語にすらその片鱗がみられるといふことは、それだけこの二作品が孝標女の「源氏物語」受容の在り方を示しているとも考えられるのではないだろうか。だが「源氏物語」の受容という要素があるのは、「源氏物語」以後の作品全てがさういわれるのと、実はたいして理由は変わらない。特に擬古物語(中世王朝物語)全体の傾向に顕著である。しかし、このような彼女の浮舟思慕が与えた作品への影響から、「源氏物語」受容の様相・変奏の様子も考えることが出来ること、つまり散逸であれ、その要素を担っていることを物語史全体からとらえられる重要性は見逃せない事実である。最後に、最初に散逸物語の存在意義を唱えた際には、その本質まで考察しきれない様々な問題があつたため、今回はおまかに捉えることしかできなかった。また、どうしても「源氏物語」以降の物語をその影響下においてとらえることを第一にしてしまつたため、散逸といふ本文のない物語、つまりは自由に私に述べることの出来る作品までも始した結果、二作品が内容確認だけで終わり、それぞれの和歌と影響関係にある和歌や作品の考察まで今回は述べられなかった。以後考察を進めて次論に続けたいと思う。

られては、天喜頃の全く古歌の内容を敷衍した小説が出来、特に抒情的なあはれ型の短編小説に於いて、かうした親近度が深く、長篇中篇に於いても、多かれ少なかれ、やはりこの傾向は見られ、中には内容の重要な場面を古歌に負ふらしいもの杯があり、題名をさういふ古歌の語句から採つたものも見える。(注9)

と述べられている。これが一種の流行であり、和歌と物語の密接な関連が知られよう。

また、散逸物語の場合の題名についてであるが、今井氏は「あらば違ふ夜の歌く民部卿」「なにぞ心にと欺く男君」「かばね尋ぬる宮」「自ら悔ゆる」「心高き東宮の宣旨」などには物語の中心が示されているように見えるし、しかも男性の側に悲劇的な弱さを見せるものがあるのは、貴族全盛期と言われる院政開始以前のものに見えては、「みづからくゆる」は暗な要素がある。(中略)「朝倉」などには希望的思考の投影とみられるところがある。(注10)

と述べられている。この傾向もあわせて、二作品の背景がうかがえよう。

次に孝標女の作品の成立順についてだが、松尾氏は

この物語は浜松より後の登場人物の性格に深味をましてあるやうにみえる点に於て浜松より後の作であり、寝覚よりも登場人物の性格が自己の好みから離れて描き分けられてゐない。登場する三人の女が、皆己れの好みの夕顔・浮舟型になつてしまつてゐる如く、やうにみえる点に於て、寝覚に先だつて作品のやうに考へられる。(注11)

と、登場人物の性格から述べられている。樋口氏は「みづからくゆる」について「朝倉」との比較から

同じ孝標女作と推測される「朝倉」に比べると、浪漫的色調ははるかに薄く、不意な恋を遺棄し苦惱する主人公像が、後の「狭衣物語」の主人公狭衣に近似する点を考慮すると、孝標女作としても、かなり後年の執筆ではなからうか。(注12)

孝標女が現実には果たせなかつた夢を、物語の世界で思うさまふくらませたのが「朝倉」であり、「源氏」を下敷にした她女作であつたのではなからうか。すなわち「朝倉」は、物語作家として遅い出発をする彼女が、「浜松中納言物語」「みづからくゆる」・さらには「夜の寝覚」などの創作に乗出す前に、まず書いておかなばならなかつた始発の物語であつたかと思われ。(注13)

と、述べられている。氏は、寛徳二(一〇四五)年十一月(孝標女・三十八歳)の初度石山参詣のあとに、「朝倉」・「みづからくゆる」

◎参考文献

* 本文に引用した和歌は「新編国歌大観」(角川書店)による。
* 「源氏物語」は旧岩波大系「源氏物語」一〜五巻より、「更級日記」は新岩波日本古典文学大系「土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記」(岩波書店・平成元年十一月)による。

- 注1 樋口説によると、建久三(一一九二)年三月〜同七(一一九六)年十一月以前の建久中期か、とされる。
- 注2 旧岩波日本古典文学大系「狭衣物語」三谷栄一・関根慶子校注昭和四十年八月・五十九頁
- 注3 松尾聰「一五自ら悔ゆるの物語」「平安時代物語の研究」(東京宝書房)昭和三十年六月
- 注4 小木喬「第二章各説 一九六みづからくゆる」「散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編」(笠間書院)昭和四十八年二月
- 注5 樋口芳麻呂「第二章平安・鎌倉時代散逸物語の研究 第六節「みづからくゆる」物語」「平安・鎌倉時代散逸物語の研究」(ひたく書房)昭和五十七年二月
- 注6 石川徹「第十章「みづからくゆる」物語考」「王朝小説論」(新興社)平成四年二月
- 注7 注3・注5と同書
- 注8 注6と同書
- 注9 神野藤昭夫「散佚物語(後期)」一「体系 物語文学史 第三巻 物語文学の系譜 平安物語」(有精堂)昭和五十八年七月
- 注10 注3と同書
- 注11 松尾聰「平安時代散逸物語の研究序説」「平安時代物語論考」(笠間書院)昭和四十三年四月
- 注12 注4と同書
- 注13 注3と同書
- 注14 注2と同書・五十九頁
- 注15 注3と同書
- 注16 注2と同書・四七七頁

- 注 17 注 6 と同書
- 注 18 注 3 と同書
- 注 19 注 9 と同書
- 注 20 樋口芳麻呂「第二章平安・鎌倉時代散逸物語の研究 第五節「朝倉」物語」「平安・鎌倉時代散逸物語の研究」〔ひたく書房〕昭和五十七年二月
- 注 21 樋口芳麻呂「物語歌合と物語歌集」「和歌と物語」〔風間書房〕平成五年九月
- 注 22 鈴木弘道「後代物語への影響」『源氏物語講座 第八巻』（有精堂）昭和四十七年
- 注 23 松尾聰「一六朝倉の物語」「平安時代物語の研究」〔東寶書房〕昭和三十年六月
- 注 24 石川徹「第二十三章 「心高さ」を主題とする作り物語の系譜」『平安時代物語文学論』（笠間書院）昭和五十四年四月
- 注 25 石川徹「第十章 平安朝に於ける物語と和歌との相互関係に就いて」『古代小説史稿』源氏物語と其前後（刀江書院）昭和三十三年五月
- 注 26 注 5 と同書
- 注 27 注 2 と同書
- 注 28 辛島正雄「「名のりをしつゆかぬ」女君の物語」『朝倉』物語管見（論集源氏物語とその前後 3）（新典社）平成四年五月
- 注 29 注 2 と同書
- 注 30 今井卓爾「第六章 散佚物語の研究」『物語文学史の研究 後期物語』（早稲田大学出版部）昭和五十二年六月
- 注 31 注 3 と同書
- 注 32 注 5 と同書
- 注 33 注 20 と同書
- 注 34 小木喬「第一章総説 第一節物語史概説」『散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編』（笠間書院）昭和四十八年二月